

大牟田の宝世界へ



有 明海、三池港、おおむた「大蛇山」まつりなど大牟田市の魅力を紹介する書籍「大牟田の宝もの100選」に、新しく地元企業が選ばれた。全国の信号機シェアの3割を占める「信号電材」だ。世界を視野に、新たに屋外照明にも力を注ぐ会社にお邪魔した。
(永野 稔一)

信号機 全国シェア3割 信号電材 (大牟田市新港町)



信号電材の本社前に設置されている3種類の信号機

大牟田市新港町の本社で信号機メーカーらしい所を見たいと、会長の糸永一平さん(61)に伝えた。本社建物の正面に、

号機が三つ並び、「耐久試験中」の文字。確かに普通見ないが、それ以上何があるのか。「右から左に新しくなってます」。えっ、同じじゃないの? じつと見ると、説明してくれた。

右はひさしが長い。光源に白熱電球を使っていた名残だそう。中央はひさしが短い。左は発光ダイオード(LED)の数が少なく、省エネ型という。なるほど、会社の歴史と工夫が凝縮されている。

創業は1972年。東京の信号機メーカーに勤めていた父親の嶋さん(故人)が、大牟田に帰郷し、従業員5人でスタート。警察への売り込みと研究を地道に重ねてきたという。

一平さんが会社の転機を覚えてくれた。相手先ブランドによる生産(OEM)だった91年のこと。東京都内の交通信号

革新技術で急成長 屋外照明にも本格参入

システムを管轄する警視庁から突然、製品開発の要請が来たのだ。「西日があたっても見やすい信号を作ってほしい、だった。当時何でも挑戦してたから、小さい会社だけどやらせてみるかと思っただけでしょうね」

が薄型の円盤を指さした。信号の模型だ。「ほら黒いでしょう。太陽光を遮断して内部に入れてないんです」。電球とレンズの間に、太陽光を通さず内部の光だけを外に出す改良型レンズなどを挟み、西日対策を施した信号機を開発。特許を取得し、自社ブランドによるメーカーに急成長した。

と合弁会社を設立。マレーシアなどアジアの街角に信号機を建て、海外展開する。地元大牟田への貢献を大切に、幼児や小学生の工場見学も積極的に受け入れ。国内の信号機メーカーでトップシェアを誇り、世界にも羽ばたく。2012年には小学3年生の社会科教材にもなった。

今の力を入れているのが屋外照明事業だ。出荷する製品名は「ATUMO」(アツモ)。名前の由来を何げなく一平さんに尋ねた。「逆さに読むとどうなりますか」。OMUTA(オオムタ)。「社内公募し残った10個ほどから決めました」。いたずら好きな少年の笑顔が見えた。



①信号機を点検する従業員。茶色や灰色と設置場所などによって本体の色を変えている
②西日対策した信号機の仕組みを説明する糸永一平さん。後方の写真は父親で創業者の嶋さん
③会社近くに設置された信号電材の信号機と屋外照明(上)